この地球と世界経済の大切なバランス

デイビッド・アッテンボローとクリスティーヌ・ラガルドの
対話に基づく

自然界では、すべてがつながっています。健全な自然と健全な経済についても、この点があてはまります。私たちが生命を存続させるためには、自然への配慮が欠かせません。そして、貧困の克服や、国際連合が掲げる持続可能な開発目標の達成には、健全な経済が必要です。

失われた自然とのふれあい

結論を申し上げると、自然に損害を与えることは、自らを傷つけることに等しいのです。経済活動が自然に与える影響が大きくなっていますが、この結果、私たちの未来が真正面から脅かされています。ある試算によれば、世界人口の50%以上が現在、都市に暮らしており、人々が自然とふれあっていない可能性があります。

地球では海面や平均気温が上昇すると見込まれていますが、こうした現象に伴い、多くの土地、ひょっとすると国土全体が住めない場所になってしまい、気候変動によって大規模な移民が生じることになるでしょう。自然界の仕組みを理解し、その保護のために何をすべきか知ることがかつてないほど重要となっています。

その第一歩として欠かせないのは、無駄こそ敵だと認識することです。食べ物やエネルギー、資源を浪費するのは、持続可能性にまったくもって逆行します。ゴミとして散乱する運命にあるプラスチックの製造は、私たちの海が汚染される場合にはなおさらですが、無駄なのです。個人として、企業として、そして国全体として「害を与えてはならない」という単純明快な指針にしたがって活動できれば、私たちの誰もが変化をもたらせるでしょう。過剰消費や持続不可能な生産行為によって、私たちの地球が脅かされています。

自然のつながり

自然と経済はつながっているため、同じような原則がどちらにもあてはまります。

たとえば、金融の世界では、枯渇するまで資本を使い込みはしません。資本が枯渇すると、財務上の破綻を起こしかねないからです。しかし、自然界においては、漁業資源、森林など多くの資源が枯渇するまで使われてきました。時には大規模な破壊を招くことさえありました。私たちが経済と接するのと同じように自然にも接する必要があります。これからも長くにわたって自然の恵みを享受できるように、自然にある資源を保護するのです。

この点ですが、エコノミストにはよく理解できるものでしょう。無駄を最小限に抑え、効率性を巧みに活かし、そして、環境という私たちの共有資源が受ける損害を含めて、正確なコストを価格に反映することが重要なのです。

化石燃料エネルギー価格にその生産コストだけでなく、環境負荷も反映させるという重要な措置を講じられます。つまり炭素など温室効果ガスに価格を設定するのです。エネルギー補助金は、新しい化石燃料を見つけ出す動きが継続されるように促しています。また、乱用や浪費を奨励して自然の豊かさと人間の健康の両方を損なっています。こうした補助金は撤廃されなければなりません。IMFの調査によれば、エネルギーやその環境コストが過小に設定されていることで2017年に生じた実質的な補助金は、世界規模で見れば実に5.2兆ドルに上り、対世界GDP比で6.5%の規模となりました。

今こそ変化の時

経済と自然との共生が欠かせません。この共生を持続させるために、まだまだたくさんのことを私たちの誰もが実行できます。民間部門は、地球に害を与える産業や活動を支持したり支援したりすることをやめて、代わりに持続可能な開発に投資できます。政府は、たとえばクリーンなテクノロジーの分野で研究開発を促進して、気候変動や自然破壊と闘うための政策を打ち出せます。

今こそ変化を起こす時です。そして、この変化には誰もが参加すべきなのです。今、若い世代はこの点を理解しています。グレタ・トゥーンベリさんのような勇気ある若者を頭に思い浮かべましょう。こうした若者たちは、気候変動を阻止するために今すぐ行動を起こすよう大人たちに呼びかけています。なぜなら、若者たち自身の未来がかかっているからです。こうした若い世代がいることを考えると、希望はあります。

自然には回復する力があります。かけがえのない地球に私たちが与えた傷の一部は、まだ回復させることができるでしょう。しかし、私たちに残された時間は少ないのです。今後10年から20年の間に決定的な行動を起こさなければ、この傷は永久に癒せないものになってしまうでしょう。

私たちは一致団結し、様々な方面から取り組む必要があります。しかも、今すぐに行動を起こさなければなりません。

「あの時、見てみぬふりをして、何もしなかったの？」と将来、孫たちから厳しい言葉で非難されることがないように。FD

この記事は、博物学者であり、ネットフリックスと世界自然保護基金（WWF）のドキュメンタリーシリーズ「Our Planet」のナレーターである**デイビッド・アッテンボロー卿**と**クリスティーヌ・ラガルド**国際通貨基金（IMF）前専務理事との対談をもとに書かれたものである。

写真: RICHARD BARRETT/WWF-UK; ISTOCK/ SBAYRAM